東寺旧蔵『古錦帖』所収の平安朝の錦

道　明　三保子*

Polychrome Figured Silks of Heian Period in the Ancient Textile Album Formerly Possessed by the Toji Temple

Mihoko Domyo

要　旨　東寺（京都）旧蔵の『古錦帖』と名付けられた一冊の折本が，文化学園服飾博物館に所蔵され，そこには古裂断片47点が張り合わせられている。それらの織物は仏教関係のもので，平安・鎌倉時代のものとみなされるものが錦20点，綾6点，紋紗3点，刺繍2点，描絵1点，平絹1点が含まれ，それ以外のものも室町から江戸時代にかけての珍しい織物である。平安時代の染織遺品は数が少なく，貴重な資料である。本論文ではこれまで報告された平安時代の染織遺品についてまとめ，次いでこの『古錦帖』について基礎的調査として張り合わせられた織物を分類し，とくにその中で錦を中心に取り上げ基準作品と比較しつつ，技術的考察，文様的考察を通して『古錦帖』中の平安時代の錦の比定を試みた。錦の織法として準複様綾組織緯錦，経綾地絵緯浮文裏浮錦をなすもの，文様として奈良朝の円文構成の伝統を脱した宝相華唐草，七宝文など温和な表現を特色とするものが平安後期の錦と推定される。

は　じ　め　に

東寺（京都）は真言宗東寺派の総本山で，現在は教王護国寺を正式名称とし東寺は通称となっているが，明治以前までは東寺の名称が一貫して用いられていた。平安遷都とともに創建され，西寺に対して羅城門の東に796年に建てられたものとされている。823年に真言宗を開いた空海は嵯峨天皇からこの寺を与えられ，ここを真言研修の道場とした。この東寺旧蔵の『古錦帖』と名付けられた一冊の折本が，文化学園服飾博物館に所蔵され，そこには古裂断片47点が張り合わせられている。

古裂の右横上方に張られた題箋によれば，それらの織物は仏教関係のもので，平安・鎌倉時代のものとみなされるものが多く含まれ，それ以外のものも室町から江戸時代にかけての織物であるとされた。

平安時代は894年に遣唐使を廃止し，外国の影響を脱し日本人の美意識が形成されていった時代で，王朝文化を軸として和様化が進んだ。平安末から鎌倉初期にかけては，日本の社会が大きく転換した時期で，新しい武家政権の下で文化も変貌を遂げた時代であるが，染織工芸のような，一見小さな世界にもこのような変化の反映が映し出されるものと推察される。

ところで平安時代の染織遺品でこれまで紹介されたものは，まことに数が少ない。従って染織史研究の上でも空白期と言ってよい。わずかに知られているものはそのほとんどが国宝・重要文化財に指定されている。

そこで本論文では，まずこれまで一部が図版によって紹介されたにすぎない『古錦帖』に張り合わせられた織物の基礎的調査をしたい[1)]。次いでこれまでに報告されている平安時代の染織遺品について従来の研究をまとめ，基準作品の特色を把握したい。本稿ではとくに錦を中心に取り上げ，基準作品と比較しつつ技術的考察，文様的考察を通して『古錦帖』所収中の平安時代の錦を比定したい。以上により，奈良朝の正倉院以後の染織の展開がいかなるものであ

* 本学教授　染織史

るか，鎌倉時代へいかなる発展をとげたかを少しでも明らかにしたい。

1.　文化学園服飾博物館所蔵の『古錦帖』

『古錦帖』は表紙に花文装飾の紋織物を張った縦35.3センチ，横27.3センチの折本形式で，和紙に糊付けされた古裂断片が各頁１～４点ずつ張られている。そのため織物の裏を調査できなかったが，表の緯糸が脱落している部分を丹念に観察することによって裏の組織を知ることができた。

『古錦帖』作製のいきさつが，折本と一緒に残された文書に次のように書かれている。

明治十一年夏本寺什寶曝涼之際偏　掃庫中偶有其一隅如藍縷者検之即古衣之残片也古色藹然五彩絢爛有唐織有印金有刺繍盖古来本寺所執行法会之供具而好古家所最垂涎焉然而　其幾年代不可知焉当時住職西三條大僧正大惜之蒐集補綴置之庫中余恐其廃滅謀之四手井某と素興織物藻鑑家伊達弥介氏親善因託其鑑識伊達氏一見大驚反復精査遂抽数十種略付其年代考証此帖是也余恐後人没其来由即記顛末如此

明治二十四年初冬日

旧教王護国寺公人新庄直諒識

同様の文章が明治24年に信徒総代によっても書かれている。これらの内容は次の通りである。

「明治11年（1878年）の夏，東寺の什宝の曝涼の際，倉庫を掃除中一隅にぼろのようになった古裂を見つけたが，よく見れば様々な彩りで絢爛とした唐織，印金，刺繍などがあり，それらは本寺の法会の時に仏具として使われたものであった。好古家にとっては垂涎の的となるようなものであったが，いつごろのものであるか判らなかった。当時の住職であった西三條大僧正がこれを惜しがり，蒐集しつなぎ合わせて本寺の倉庫に保管していた。摩滅することを恐れてとくに大事に保存していたが，そのうち織物鑑定家伊達弥介氏[2]と親しくなり，鑑定を依頼した。伊達氏は一見して大いに驚き詳しく調べた結果，そのなかから数十種を選び，年代考証しこの『古錦帖』にまとめた。そしてこれまでのいきさつをここに書き記した。」

以上の内容により，『古錦帖』の由緒は明らかである。『古錦帖』の古裂のわきに張り付けられた題箋には番号，織物の名称，技法，用途，製作地，年代，類裂などについて伊達弥介氏によって鑑定された内容が書かれている。

2.　平安時代の染織遺品と従来の研究

日本の上代染織については，法隆寺・正倉院に所蔵されたおびただしい数の染織遺品によって技術・文様・用途・大陸との関係など様々な側面からの解明が進んでいる。一方，平安時代の染織に関しては，現存する染織遺品が他の時代に比べて極端に少ないため，研究がまだ十分になされていない。

先学による平安朝の染織技術の研究として，佐々木信三郎『新修神護寺経帙錦綾私見』[3]がまずあげられる。神護寺経帙錦綾という限られた資料であるが，ルーペにより準複様綾組織緯錦と経綾地絵緯綾とじ裏浮錦（佐々木氏は糸錦と称した）の組織を解明し，さらに糸質，機仕掛け，色調，国産・中国産かについても論じている。

次に京都市染織試験場『時代裂織組織一覧（図と解説）』[4]は日本染織の織組織について，すべての時代の遺品を調査し明らかにするとともに，学術用語としても適正な名称を付け，時代の変遷と織技の展開を跡付け画期的な成果をあげている。ただし各織組織に関しては概括するのみである。

また高田倭男『公家の染織』[5]をはじめとする概説的研究から，平安朝の染織に関して次のような点が明らかにされている。

今日残されている平安時代の遺品は，大部分が寺社・神社に残された仏具・調度類などで，服飾遺品以外のものが多く非常にかたよったものしか残されていない。当時の第一級品がどのようなものであったかも解らない。現実の衣服

に使われたものはほとんどない。服飾史においてこの時代は，日本の服飾で最も華やかな王朝服飾が完成されているが，それは当時の絵画作品や文学作品によって想像するしかないのである。

これまで僅かに残された染織遺品や絵画作品・文学作品などから考察されてきたことは次のようなことである。つまり平安中期以降の染織は，奈良朝のスケールの大きい唐朝風が次第に和様の繊細・優美なものになっていった。例えば色糸を用いて多色に織り出した錦は文様が小さく細かくなり，色数が少なく，奈良朝の織物のごとき雄大・華麗なものではなくなった。これは文様の固定化，弱小化，退行現象とさえ言えるものであろう。その要因として服装の長大化，かさねの流行によって，大柄な派手な文様が付けられたものよりも色の組み合わせなどに重点が置かれるようになったことがあげられる。

『古錦帖』所収の平安朝の錦を比定するにあたって，日本各地に所在する平安朝の錦の基準作を明確に把握しておく必要がある。表1はこ

表1　平安朝染織遺品…錦

所在	資料名	年代	配色	用途	指定
(1) 準複様綾組織緯錦					
清涼寺	双鳳文錦（中国宋）	986年奝然帰国	濃緑地　白，茶，萌黄，紅文	釈迦像胎内裂　東大寺の奝然（983入宋）が持ち帰る	国宝
神護寺	緑地錦			両界曼荼羅表装	
中尊寺	窠に十字唐花文錦		紅地　藍，白，萌黄文	金色堂須弥壇　藤原基衡棺の内貼	重文
中尊寺	亀甲繋双鳥連珠円文錦		紅地	藤原忠衡首桶内より発見	重文
聖護院	唐子宝相華唐草文錦	1143年	明紅地　黄，白，萌黄文	智証大師像胎内に納入された『入唐求法目録』を納めた袋地　組紐あり	重文
聖護院	七宝唐草文錦		紅地		
神護寺	唐花入り菱飛鳥文錦	1149年　1185年		経帙　後白河法皇の寄進（1185）	重文
神護寺	宝相華唐草文錦	1149年　1185年		経帙　経帙の一つに1149年墨書	重文
神護寺	唐花文錦	1149年　1185年		経帙	重文
四天王寺	錦包み懸守（7懸のうち）4種あり 菱文錦　格子文錦　亀甲繋文錦　唐花文錦				国宝
厳島神社	双子鶴丸蝶文半臂		紅地　黄，白，萌黄文	小型神宝類　雛形（安徳天皇御衣）	国宝
厳島神社	飛鳥丸文錦		紅地		
東寺	花万字文錦　花唐草文錦				
(2) 経綾地絵緯綾とじ裏浮錦（経3枚綾地　緯6枚綾文）					
神護寺	唐子宝相華唐草文錦	1149年　1185年		経帙	重文
神護寺	4枚綾地錦(不詳)錦	1149年　1185年 (ただし4枚綾地)		経帙	重文
神護寺	七宝唐花文錦	1149年　1185年		経帙	重文
四天王寺	錦包み懸守（7懸のうち）4種あり 紅地錦　赤地唐草文錦　紅地小花文錦　紺地小花文錦				国宝
(3) 経綾地絵緯浮文裏浮錦					
春日大社	牡丹唐花文錦	1131年墨書	紺地　紅文	平やなぐいに付属する矢配板の扇子の親骨にあたる前後板に張られた錦	国宝
春日大社	牡丹唐花文錦	1131年墨書	黄地	平やなぐいに付属する矢配板の扇子の親骨にあたる前後板に張られた錦	国宝
四天王寺	錦包み懸守（7懸のうち）6種あり 紺地唐草文錦　黄地唐草文錦　白地唐草文錦　紫地菱文錦　黄地花唐草文錦 紺地小葵文錦				国宝

れまで紹介されている平安時代の錦を織法によって分類し，所蔵先，製作年代と関連する年代，配色，用途などについて報告されている事項を記した。そこで平安朝の錦について表の作品より観取される技術と文様の特質について考察しておきたい。

染織遺品の織物組織を解明することは極めて重要で，とくに平安時代後期の織法は前時代から一つの転換をとげたもので，鎌倉時代にかけて用いられたが後それほど長く使われなかったものが含まれている。平安時代の織法として平織，錦と綾などの紋織，羅や紗などのもじり織が知られているが，ここで錦をまず取り上げたのは，平安時代の錦が後世の倭錦，糸錦，唐織などへ展開する重要な組織であると考えられるからである。

平安時代の錦の織法として次のものがあげられている。

(1)　準複様綾組織緯錦（以下平安様緯錦と略称する。図１）

この織物組織は，佐々木信三郎氏により準複様綾組織緯錦と称された。

奈良時代の緯錦が緯糸と母経とによる組織が表が緯の３枚綾，裏が経の３枚綾組織となるのに対して，平安様緯錦は，緯糸と母経とによる組織が表裏とも緯の３枚綾で，しかも母経３本のうちの１本は緯糸を表裏に分け文様の表出にもあずかる。佐々木氏は「陰経は組織上必要でなくなり表裏に別れている緯の間にはさまって芯となっているため芯経と呼ばれる。しかし比較的密度が粗い経糸において，文様の輪郭の乱れをいくぶんか救い，裂の地味をひきしめて重厚さを加える。芯経を省略したならば地味は著しく薄手となるであろう。」と述べている。しかし芯経の機能についてはさらに考察する必要があろう。とくに緯糸の色の境目で文様を明快に表現するにはこの芯経が必要なのではなかろうか。

このように一見同じように見えながら，奈良様緯錦と平安様緯錦の組織が相違することは，経糸の機仕掛けが異なること，しかもそれが両者の織機の構造が基本的に異なること，つまり平安後期にはすでに新しい機構の織機が導入されていたことを示している。このことはすでに『神護寺経帙錦綾私見』(p. 27–28）にも『時代裂織組織一覧』(p. 37）にも指摘されている。すなわち奈良様緯錦では陰経のみ紋綜紈に連携しており，母経は地組織用の上掛けの地綜（伏機）に通されるだけである。一方平安様緯錦の場合は隣り合う母経と芯経（陰経）とが組とな

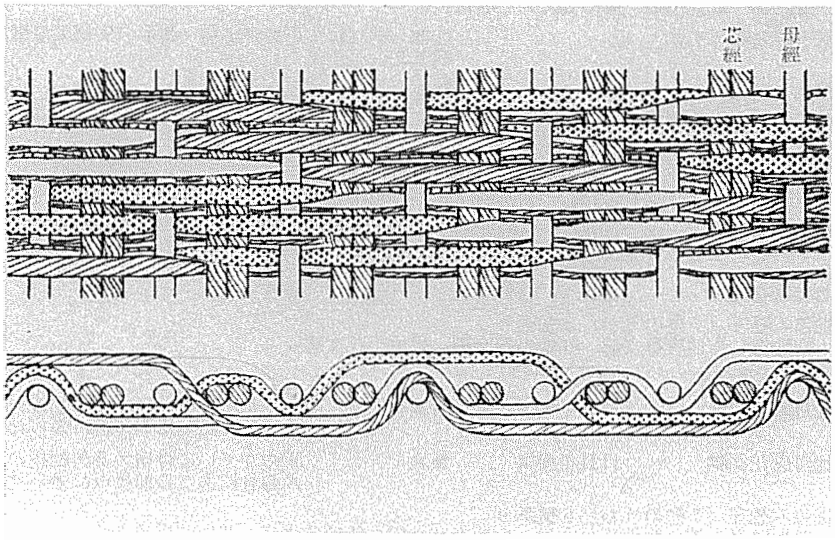

図１　準複様綾組織緯錦

り紋綜絖に連携しており，母経はさらに上掛けの地綜と下掛けの前綜にも通される。筆者は奈良様緯錦と平安様緯錦の経糸の機仕掛け図を作製し比較することによって，以上述べたことを明解に説明できると考え，その図の作製を試みているところである。

各時代に使われた織物組織を網羅した『時代裂織組織一覧』によれば，この織法は作例としてで緯3枚の他に緯4枚綾のも製作されたが，平安朝末より鎌倉時代初期までしか続かず，風通様緯錦へとさらに技法が変わっていったとされる。従って準複様綾組織緯錦は平安末から鎌倉初期の錦の比定に大きな役割を果たす。風通様緯錦とは，経糸が表の緯糸とのみ組織する経糸と，裏にまわる緯糸とのみ組織する経糸とが交互に配置されているものである。

(2) 経綾地絵緯綾とじ裏浮錦

経3枚綾組織地に絵緯は6枚綾組織右流れの地絡みでとじられ，裏で浮いている。この組織は奈良時代の正倉院の染織には虎文錦1点のみ報告されているだけである。布帛全体が経糸と地緯で形成され，文様表出のために絵緯が割り込んでいる。この点は，緯糸すべてが布帛の構成に関わっている上代の錦と異なり，後世の錦の形態となっている。『時代裂織組織一覧』によれば，製織は上代錦を作る伏機だけの織機では不可能であるとされている。上代でも経綾地緯綾文の織機ならば綾織りから発展した錦と考えられることである。

鎌倉時代の作品は東寺（舞楽装束水引部分の赤地唐獅子丸文錦），奈良伝香寺所蔵の錦2点のみで，室町時代の例も非常に少ない。やはり平安時代の染織品の比定にとって重要な織法である。ただし後述の表2に観取されるように『古錦帖』にはこの種の組織は見当たらない。佐々木氏は平安時代における新来の唐錦がこれにあたるのではないかと推定している。

(3) 経綾地絵緯浮文裏浮錦

経糸と地緯でもって経綾の地を作り，地組織に関わらない絵緯を用いて浮文を表わす。裏面では絵緯は浮いている。『時代裂織組織一覧』(p. 43-45）によれば，平安時代のものには経3枚綾組織のものと経6枚綾組織のものとの2種あると言う。この織法は鎌倉以降も発展をとげ，桃山・江戸時代にかけては豪華な唐織となる。平安時代の織法は絵緯を全幅に通すものである。小模様に織られている。

3. 『古錦帖』所収の平安朝の錦

筆者は，本稿において『古錦帖』所収の平安朝の錦を比定するための，また将来『古錦帖』の染織品の詳細な報告書を作成するための，その準備段階として『古錦帖』所収のすべての断片に関して文様，材質，技法，配色，寸法などの基礎調査を行った。とくに技法に関しては伊達氏が倭錦の語を頻繁に使い大ざっぱな分類を行っているのに対して細かく織物組織を示した。織法の違いが年代を推定するにあたって重要であると考えたからである。その結果，『古錦帖』の染織品を日本染織史の流れの中に位置づけるためには，平安・鎌倉時代と推定されるグループと室町時代以降と推定されるグループに分けることが妥当と考え，基礎調査の結果と筆者のこれまでの日本染織史に関する知識に基づいてこの二つのグループにひとまず大別し，表2，表3に技法別にまとめた。平安・鎌倉時代のグループとしたものは錦20点，綾6点，紋紗3点，刺繍2点，描絵1点，平絹1点であった。

また表の各資料の記述の末尾には，伊達氏の添付した題箋の内容を記した。題箋では年代が例えば大凡八百年外物とあるのを凡そ八百年以上前という意味とみなし，世紀で示した。伊達氏の示した年代は二つのグループに分けるにあたっては筆者の見解とも一致したが，この何百年前に関しては妥当であるか，各資料を十分検討しなければならないであろう。またグループ分けに関しても刺繍と描絵の断片は比較例を渉猟し再考する余地があるし，また鎌倉期のものが室町初期まで下がる可能性も残されている。

次に平安朝に見られる組織をもつ『古錦帖』

表 2 『古錦帖』所収染織品（平安・鎌倉時代）

番号	資料名	材質	配色	寸法(センチ)	伊達氏題箋内容
(1)	錦				
イ・平安様緯錦　準複様3枚綾組織緯錦					
1.	宝相華唐草文錦	絹	紅地　白,緑,藍文	12.2×25.4 耳あり	
37.	宝相華唐草文錦	絹	紅地　白,緑,藍文	19.5×25.5	10世紀　倭錦の祖　日本製　仏具用　正倉院御物と同種
29.	宝相華唐草丸文錦	絹	紅地　白,緑,藍文	18.0×28.0	11世紀　倭錦　日本製　仏具用
31.	花唐草文錦	絹	藍地　黄文	24.6×5.2	11世紀　倭錦　日本製　仏具用　30と同じ
33.1	蝶鶴丸文錦	絹	藍地　黄，緑文	25.5×14.2	11世紀　倭錦　日本製　仏具用　30と同じ
33.2	蝶鶴丸文錦	絹	藍地　黄，白文	25.5×6.4	11世紀　倭錦　日本製　仏具用　30と同じ
ロ・経綾地絵緯浮文錦					
30.	花鳥浮文錦	絹	藍地　白茶文 経4枚綾地	29.5×21.5	11世紀　倭錦　日本製　仏具用
32.	七宝繋花浮文錦	絹	藍地　紅文 経3枚綾地	15.8×10.8	11世紀　倭錦　日本製　仏具用　30と同じ
ハ・鎌倉様緯錦　風通様3枚綾組織緯錦					
2.	花唐草・丸文錦	絹	紅地（赤茶） 白，緑文	12.2×16.8	
4.	唐草文？錦	絹	黄地　白，緑文	9.0×11.8	
21.	蓮台唐草文錦	絹	紅地　白,緑,黄文	22.1×29.0 組紐の縁取り	11世紀　倭錦　日本製　製作巧妙
22.	蓮台唐草文錦	絹	紅地　白，緑文	10.0×18.6	11世紀　倭錦　日本製　製作巧妙　21と同種
24.	蓮唐草文錦	絹	紅地　白，緑文	10.6×8.4	11世紀　倭錦　日本製　製作巧妙　21と同種
18.	牡丹獅子丸文錦	絹	黄地　藍,緑,白文	22.8×7.0	11世紀　倭錦　日本製　製作巧妙
23.	牡丹獅子丸文錦	絹	黄地　藍，白文	14.4×9.6 組紐の縁取り	11世紀　倭錦　日本製　製作巧妙　21と同種
25.	牡丹獅子丸文錦	絹	黄地　藍，白文	19.0×6.3	11世紀　倭錦　日本製　製作巧妙　21と同種
26.	蓮唐草文錦（裏）	絹	黄地　緑,紅,白文	7.4×27.3	11世紀　倭錦　日本製　仏具用
27.	蓮唐草文錦	絹	黄地　淡青文	6.5×28.1	11世紀　倭錦　日本製　仏具用　26と同じ
28.	蓮唐草文錦	絹	緑地　黄，褐色文	21.1×6.8	11世紀　倭錦　日本製　仏具用　26と同じ
5.	蓮開花文錦	絹	紅地　緑，黄， 薄紫文	25.1×24.2	
(2)	綾（経4枚綾浮文綾）				
34.	牡丹唐草文黄茶綾	絹	黄茶（後染め）	17.0×27.0	35と同種なるも年代なお古い　正倉院聖武天皇御褥に近い
3.	花唐草文紅綾	絹	紅（先染め）	14.1×13.1	
6.	紅綾	絹	紅（先染め）	5.8×19.4	11世紀
35.	茶綾	絹	茶（先染め）	9.4×22.1	11世紀　日本製　高野天野神社蔵舞楽装束と同種
36.1	緑綾	絹	緑（先染め）	6.3×22.8	11世紀　35と同種
36.2	紺綾	絹	紺（先染め）	3.5×20.4	11世紀　35と同種
(3)	紋紗				
19.	花鳥刺繍唐草紋紗	絹	金茶地	20.0×17.4	12世紀　高野天野神社蔵舞楽装束・東大寺八幡蔵田楽法師水干と同種
20.1	描絵菱紋紗	絹	金茶地	11.3×19.7	11世紀　日本製　太子漢東写の描染
20.2	描絵菱紋紗	絹	金茶地	10.6×18.8	11世紀

(4) 刺繍				
39. 花文刺繍平絹	絹	萌黄地	29.1×19.4	9世紀 日本製 高野天野神社蔵打敷と同種
40. 独鈷文刺繍	絹		6.4×22.0	9世紀 独鈷の如きは印度製
(5) 描絵				
38. 花円文描絵	絹		24.0×7.0	9世紀 奈良製 この種に印金もあり
番外 平絹				

表3 『古錦帖』所収染織品（室町時代以降）

番号	資料名	材質	配色	技法	寸法(センチ)	伊達氏題箋内容
14.	波梅文錦	絹・綿	赤茶地 黄，緑，藍文	経6枚繻子地 絵緯半越6枚とじ	28.8×22.8	14世紀 三韓製 黄緞の祖
15.	青梅波福寿文錦	絹・綿	茶地 黄，藍，白，浅黄文	経6枚繻子地 絵緯半越6枚とじ	25.8×22.8	14世紀 三韓製 黄緞の祖
16.	青梅波福寿文錦	絹・綿	赤茶地 黄，緑文	経6枚繻子地 絵緯半越6枚とじ	28.0×11.4	14世紀 三韓製 黄緞の祖
17.	青海波福寿文錦	絹・綿	赤茶地 黄，藍，薄藍文	経6枚繻子地 絵緯半越6枚とじ	26.9×10.4	14世紀 三韓製 黄緞の祖
9.	斜格子八弁花文錦	絹	黄地 緑，赤，白文	経3枚綾地 絵緯浮文	7.5×16.3 組紐の縁取り	15世紀 日本製 唐織の祖
11.	松鱗文唐織	絹	萌黄地 白，黄文	平地 縫取浮文（縫取 半越）	20.0×4.4	15世紀 日本製 唐織の祖
8.	石畳緞子	絹		繻子組織 経5枚 緯5枚	27.3×18.2	17世紀 日本製
番外	楠正成宝剣袋	絹・金糸		金襴 経5枚繻子地 別絡み 全越		
13.	瓜文浅黄綾	絹	浅黄	綾地綾文綾 経6枚 綾地 緯6枚綾文	29.7×21.2	14世紀 日本製 東大寺八幡 袍の裂と同種
10.	格子亀甲花文刺繍	絹	茶地 藍，緑，白文	茶平絹地に刺繍・印金	26.9×10.6	16世紀 日本製
12.	花卉図描絵	絹		粗い平織	30.4×8.8	14世紀 仏具用
時代不詳						
7.	薄平麻織物	麻	白 藍	平織	28.5×10.1	時代不詳 麻織

の資料について主として文様の面から詳述し，平安期のものと見なす根拠を示したい。

第37号 宝相華唐草文錦（図2）は準複様綾組織緯錦である。濃い紅色の地に白，緑，藍で宝相華唐草文を表わす。第1号の宝相華唐草文錦は同一文様である。平安時代の染織遺品は数が少なく，また小さな断片が多いため，全体の文様構成や文様モティーフが明確にわかる例ははなはだ少ない。そこで第37号錦を主に欠落部分を第1号錦でおぎない文様の描き起しを試みた（図3）。退色や糸の脱落している部分が多く，またもともと織物組織が文様を明確に表出しておらず，またモティーフ自体も厳格な形象となっていないため，文様を読み取るのはかなり難しい。文様構成は経方向に2本，緯方向に2本の対称軸を持ち，左右対称，上下折り返しとなり，蔓が円弧を描いて連結し規則正しく四方に連続していく。しかしそこには幾何学的曲線の堅苦しさはなく，穏和なリズムで四方に広がっていく。文様は空間の枠組みに限定されない外への広がりを感じさせる。蔓の先端は多弁形の側花文につながっている。側花文は対称軸上のものは対称形の厳格さを感じさせず，ふっくらと柔和な表現となっている。対称軸上でない側

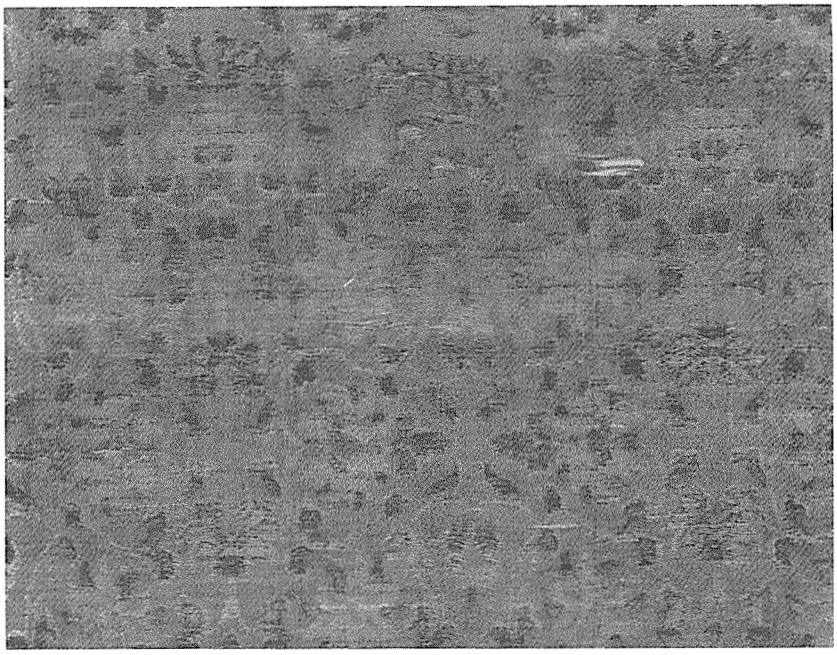

図2　第37号　宝相華唐草文錦

花文は1種のみで，それも側花文と開花文の中間の角度がとられている。花は花弁数が不明確で，花の種類も特定できない。蔓の途中からわずかな間隔をあけて片側あるいは両側に次々と葉が伸びており，そのため地には空白を残さない。配色は退色して赤茶色となった紅地に花，蕾，蔓が白で，葉が緑と藍であるが，一方花芯は逆に緑と藍，葉は表側の輪郭のみ白を用いている。奈良朝や平安朝初期によく見られた暈繝の配色はまったく見られない。色の配分やモティーフによって横段状の構成が目につきやすい。

経緯とも撚りがなく，経糸は自然色，細めに対して，緯糸は太めで地色に紅，モティーフに白，緑，藍が使われている。

以上の如き文様の構成とモティーフの表現は，染織史上どのように位置付けられるか。また他の美術工芸に見られる文様と比較できないだろうか。奈良時代の錦の文様は，主文と副文を互の目に配置したものが基本となっていた。すなわち円形にまとめられた主文とこれよりもやや小さめの菱形にまとめられた副文を互い違いの位置に配したものである。文様は象徴性の強いもので，左右対称形，上下折り返しなど厳格な構図をなし，その枠組みの中に秩序づけられていた。有職の織物では，地文の上に上文を積み重ねた構成となる。染織も基本構成は奈良時代と鎌倉以降ではこのように変わるが，平安時代の染織文様はその過渡期として，奈良的なものが次第に後退し，新しい文様構成の芽生えが見られる時代であろう。

第37号は奈良時代の文様構成をすでに脱却して，地文のみを構成している。このような構成は後世の名物裂にもよく見られるが，このモティーフの種類は平安時代後期の仏教美術における装飾文様に非常に類似したものが見出されるのでここに紹介する。

中尊寺金色院所蔵の金銅透彫華鬘（12世紀）の宝相華（図4）は対称形構図でありながら蔓や花が様々な方向性をもっているので枠にはまらない広がりを感じさせる。花や蕾，葉などの表現が第37号と極めて類似するが，華鬘はより

図3　第37号　宝相華唐草文錦

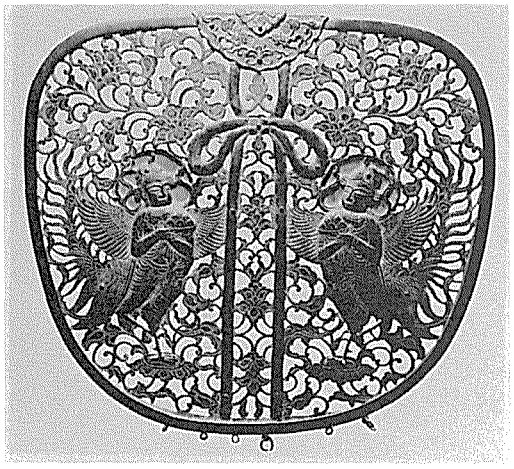

図4　中尊寺金色堂　金銅透彫華鬘

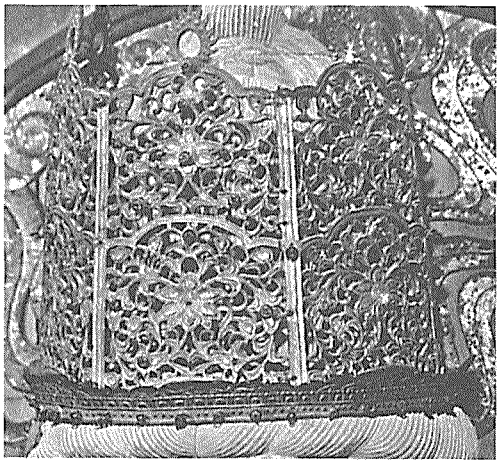

図5　中尊寺　一文字金輪大日如来座像宝冠

形象が明快で端正な作風をもつ。宝相華を地文として，その上に迦陵頻伽が鋲留めされており，染織文様における地文と上文の関係と同じもので，このような唐草文が染織文様においても地文となる可能性を示している。

中尊寺所蔵の一文字金輪大日如来座像（12世

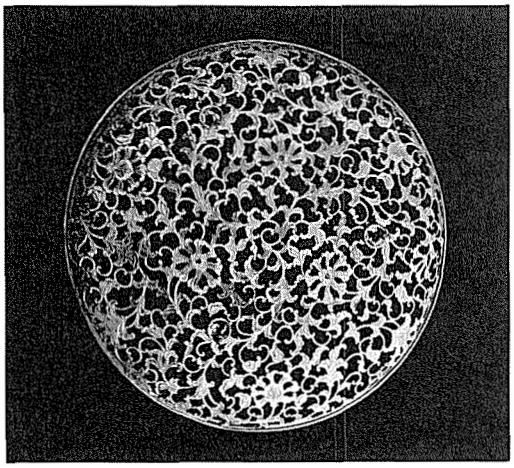

図6　神照寺　金銅透彫華籠

紀後半）の宝冠の宝相華唐草（図5）はやや形象があいまいで温和な花葉の姿はいっそう第37号と類似する。

これら以外にも同様の宝相華唐草を見つけるのは容易で，第37号の錦の文様は12世紀頃の仏教関係の装飾文様として広く使われていたものと共通する。

宝相華唐草文は，時代が下ると神照寺所蔵の金銅透彫華籠（13世紀）の唐草文（図6）に見るように形象に写実性と強い張りが見られ，同時に先が丸くなったC字型の蔓が目立つ。また文様の種類として蓮花文が仏教関係の工芸品に多く見られるようになる。第37号宝相華唐草文錦は織法からも文様からも平安末期のものである可能性が高い。

第29号　宝相華唐草・丸文錦（図7，8）　準複様綾組織緯錦で第37号に近い作風の文様をもつ錦である。円文はすでに主文・副文の互の目構成から脱却して，宝相華唐草の地文に対して丸文は上文に近い役割を果たしている。宝相華は第37号と同じく経，緯方向それぞれ二つずつの対称軸を有するがあくまでも温和な表現となっている。丸文の中は対になった蝶か鳥か，花文かはっきりしない。

第33号　蝶鶴丸文錦（図9）　同じく準複様綾

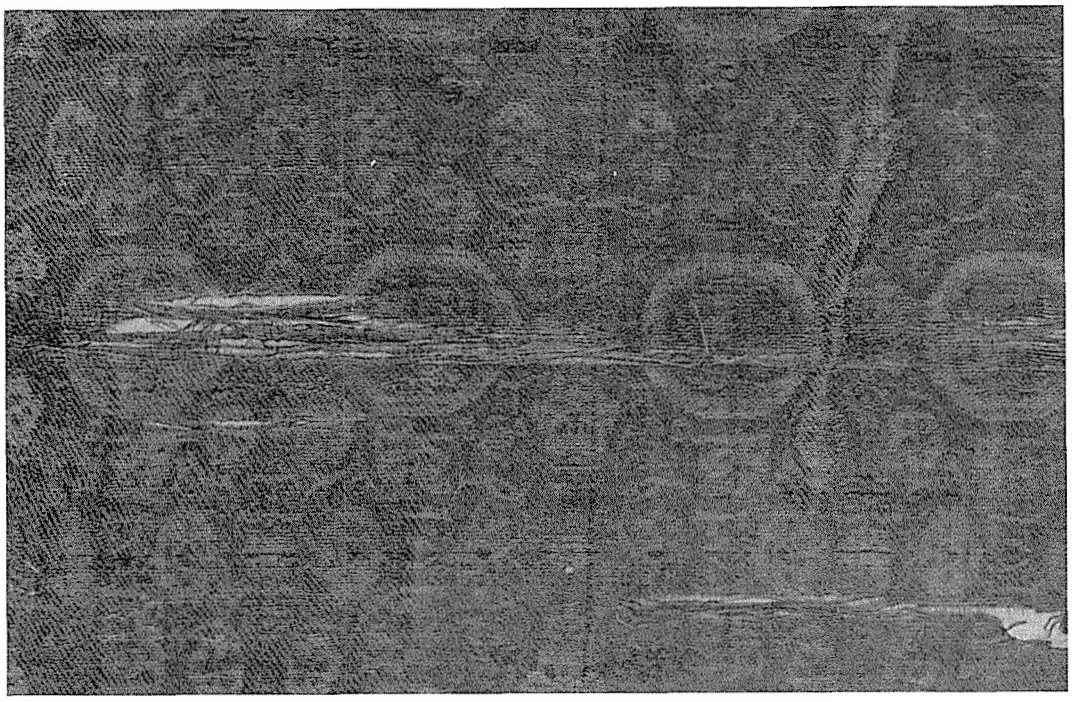

図7　第29号　宝相華唐草・丸文錦

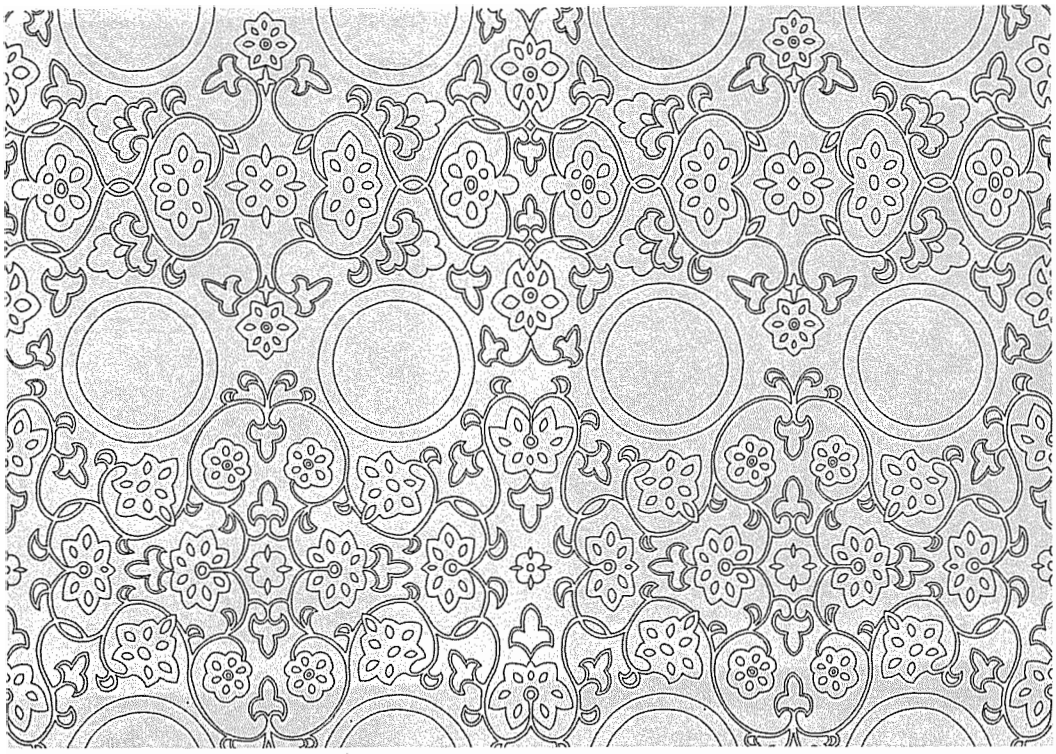

図8　第29号　宝相華唐草・丸文錦

図9　第33号　蝶鶴丸文錦

組織緯錦であるが，奈良時代の円文構成の名残りをとどめる文様をもつ。奈良時代の円文構成が主文の円文1種，副文の菱形文1種で構成されているのに対して，円文は小さく，中のモティーフは奈良時代のごとく対称形でなく向かい文になった蝶，鶴，花びら文（雲文？）の3種もあり，菱形の副文も4弁花文であるが段ごとに形が変わる。また円文と花文との大きさも同じくらいでいわゆる主文・副文の関係ではない。円文構成の衰退期の構成で，やはり平安時代のものであろう。

第32号　七宝繋花文錦（図10）　経綾地絵緯浮文錦。縹地に紅色で，小さな花葉の集合体で七宝　文を表わす。七宝文はすでに奈良時代からあり，世界的にみても極めて普遍的な文様の一つであるが，とくに平安時代後期の装飾文様にはしばしば見られる。染織の地文に用いられた例として中尊寺金色堂須弥壇の藤原清衡棺中の掛蒲団の表地の裂（1128年　図11）がある。地

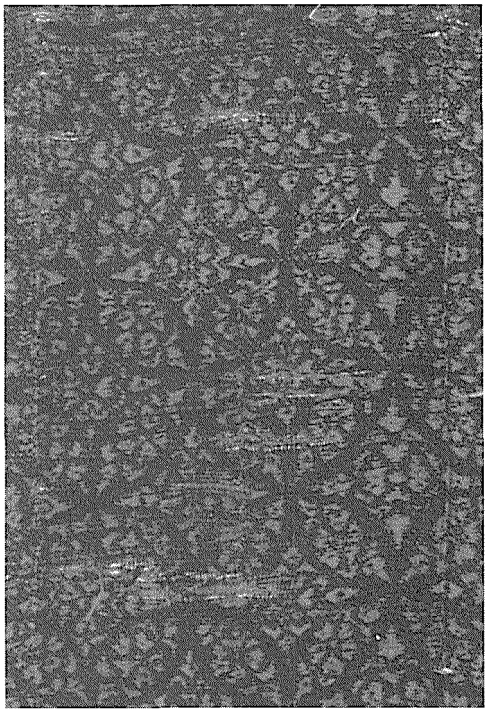

図10　第32号　七宝繋花文錦

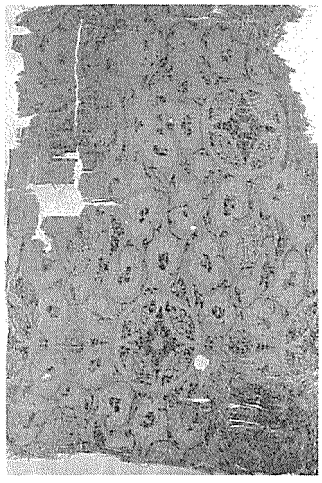

図11　中尊寺金色堂須弥壇　藤原清衡棺中の掛蒲団の表地の裂

文の上には八稜形花文が置かれている。また聖護院の七宝唐草文錦（1143年　図12）は上文に七宝が使われている。四天王寺の懸守には浮文錦（図13）の上に七宝形をした装飾金具が取り

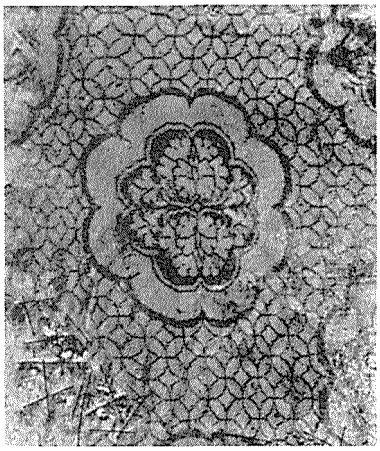

図12　聖護院　七宝唐草文錦

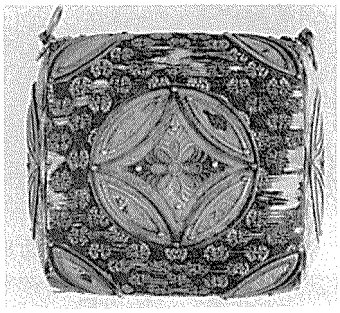

図13　四天王寺　懸守

付けられ，ちょうど錦の上文のような効果を出している。七宝文は12世紀頃流行した装飾文様の一つであったと見なされる。懸守の地も経綾地絵緯浮文錦で，第32号の文様も地文的要素が強い。第32号の文様も12世紀の平安後期の文様を示すものであろう。

お　わ　り　に

目下のところ筆者が『古錦帖』所収の古裂中で平安時代の錦と想定するものは，準複様綾組織緯錦のグループと経綾地絵緯浮文錦のグループである。これらに関しては今後さらに糸質，組織，文様などについて詳しく調べてみたい。

一般に言えることは，文様モティーフとして平安後期に多いのは宝相華唐草文，七宝文など

で，鎌倉時代に入ると蓮花文が多くなってくる。これは仏教工芸における装飾文様とも対応することで，平安・鎌倉の染織遺品は寺院に伝来するものが多い故当然のことと言える。

平安時代の錦を和様化としてのみ位置づけるのか，中国の影響はまったくなかったのかは検討する必要があろう。遣唐使を廃止したとはいえ，平安時代に中国との関係がまったくとだえたわけではなく，宋代の文物は私貿易を通じて日本へもたらされていた。この間の中国染織史を跡づける必要があろう。最近中国から輸入された宋，元，明時代の染織遺品がチベットで発見され，中国染織史において空白期になっていた時代の解明が進みつつある。国産・外国産の区別は非常に難しいが，日本のものがどの程度オリジナリティーがあるのか考える必要がある。今回は平安時代の錦のみを取り上げたが，『古錦帖』所収の鎌倉時代の錦についても考察すれば，平安末から鎌倉にかけての錦の展開がより明確となろう。また『古錦帖』には綾，紋紗，刺繍，描絵，組紐などの資料も多く含まれ，当時の染織工芸を展望するための貴重な資料となっている。錦と綾の織機がそうであるように，新しい織法の展開は互いに関連しつつなされているので，それらを総合的に考察することも必要であろう。また『古錦帖』所載の14世紀以降の染織品も興味深いものがある。『古錦帖』に関しては平安時代の錦を含めて今後さらに精査し報告書を作成する機会をもつこととし，本稿をその予備報告としたい。

付記　本稿における織物技術分析データを再確認して下さり，また織物技術に関する数々の有益な御教示を賜った西陣の織物技術研究家・中村雄一郎氏に深謝の意を表したい。なお筆者は1989年10月シカゴにて開催された国際染織史学会（Centre International d' Étude des Textiles Anciens）において，『古錦帖』所収の準複様3枚綾組織緯錦を中心に奈良から平安・鎌倉への織技と文様の展開について発表した。

註

1）文化学園服飾博物館：『文化学園服飾博物館名品抄』1979年，p. 56-57に『古錦帖』所収の古裂4種のカラー図版が掲載されている。

2）四世伊達弥助は西陣の機業家で，明治初めの京都における養蚕及び製糸に最初に功績をあげた人。明治6年にはウィーン万国博覧会に随行後，滞欧2年英仏独スイスなどの染織業を視察，参考品を多数持ち帰り，西陣機業の発展に大いに貢献した（佐々木信三郎：『西陣史』，思文閣出版，1932年，復刻1980年，p. 287，295）。『古錦帖』の古裂のわきに張られた題箋を見ると正倉院，東大寺，高野山天野神社などの染織品に通じていたことが判る。

3）佐々木信三郎：『新修神護寺経帙錦綾私見』川島織物研究所報告（第一報），1958年

4）京都市染織試験場：『時代裂織組織一覧（図と解説）』京都の染織技術変遷調査研究報告書織物編その1，1985年

5）高田倭男：『公家の染織』日本の染織　第2巻，中央公論社，1982年

6）切畑健：「平安時代世俗的染織文様―唐様から和様への試考」服装文化155号，1977年。角山幸洋：「平安時代の染織」服装文化155号，1977年。高田倭男：「平安時代の染織」月刊文化財289号，1987年。

図　版　出　典

図1　佐々木信三郎：『新修神護寺経帙錦綾私見』第14図

図3　作図　吉村紅花

図4　奈良国立博物館『仏教工芸の美』1982年　図版30-2-1

図5　『世界美術全集』第5巻　日本(5)平安2　角川書店　1962年　カラー図版20

図6　奈良国立博物館『仏教工芸の美』1982年　図版120

図8　作図　吉村紅花

図11　京都国立博物館『日本の染織―技術と美』1987年　図版41

図12　京都国立博物館『日本の染織―技術と美』1987年　図版39

図13　京都国立博物館『日本の染織―技術と美』1987年　図版44